

## 『情報学』

一九九一年八月、「梅棹忠夫著作集」第四卷所収、中央公論社刊

## 解 説 —— マルクスをこえる最後の文明史論

高 田 公 理

みぞうの「高度情報化」が、人類社会における「コミュニケーション」を活発にしている。その「国際的な側面」は、インターネット上で普及しつづける「英語」に託され、それを「コンピューター技術の急速な発達」がささえている。こんなことをいうと、「それは自明の事実なのではないか」

といわれそうである。しかし本書の著者なら、すべてに疑問を呈するであろう。

「なにが『高度』なのか。漢字変換の容易なワープロの普及で『かかれる日本語』のなかの漢字がふえている。こんな言語で日本文明は未来社会に適応できるのか」

「情報とコミュニケーションとは直結しない。情報とは、生物が環境の性質をよみとくさいの行為対象の属性である。情報化は、はるかに広大な文明史の問題である」

「単一の言語の過剰な普及は、のぞましいことではない。言語をふくめて異質な文化が、相手の存在を許容しながら『やりとり』することこそが、めざされるべきである」

「コンピューターの発達は重要だが、それだけで未来がきりひらけるわけではない。芸術・学術・技術・芸能など、ゆたかな文化の創造こそが、みのりある情報文明をうみだす」

あらためてたずねたわけではないが、こんなこたえがかえってきそうな気がする。そのことが、あらためて本書をよんだ、わたしの感想であった。

\*

梅棹忠夫氏の「情報産業論」が発表されたのは、池田内閣による「所得倍增計画」から三年目、黒四ダム（黒部川第四発電所）が完成した一九六三（昭和三八）年のことである。それは、戦後の荒廃から復興した日本の近代的工業化が、それをささえる潤沢な電力の供給によって本格化しようとする時代に、おりから隆盛の時期をむかえたテレビをはじめとする放送産業に注目して、情報産業社会の将来を展望したのであった。

その冒頭で本書の著者は、「情報」ということばを、もっともひろく解釈して、人間と人間のあいだで伝達されるいっさいの記号の系列」ととらえる。そして「放送産業だけでなく、新聞、ラジオ、テレビなどという代表的マスコミのほか、出版業はいうまでもなく、興信所から旅行案内業、競馬や競輪の予想屋」、さらには教育・宗教までも「情報産業」という、みずからの造語によって一括し、それらが「物質としての商品とはいちじぶるしくことなるなにか」を販売することで成立している点を指摘する。そのうえで農業生産の開始以降の人類の産業史を、つぎのように展望する（文責は筆者）。

これまで人類文明史は二つの革命を体験し、いま第三の革命を体験しつつある。第一

は農業革命、第二は工業革命、第三は情報産業革命である。それは動物の発生学とのアナロジー（類推）をもちいると、つぎのように解釈できる。ここでいう「発生」とは、受精した卵細胞が分裂をくりかえし、内胚葉・中胚葉・外胚葉と名づけられた三つの部分からなる胚を形成し、やがて成体になるまでの過程を意味する。その過程を単純化していえば、内胚葉からは消化器官系が、中胚葉からは筋肉・骨格系が、外胚葉からは脳・神経系と感覚諸器官が、それぞれ形成される。ならば、農業革命で達成された農業の時代は、人間の「腹のたし」、すなわち内胚葉に由来する消化器官系の機能を充足させるという意味で、この段階の産業は「内胚葉産業」と名づけられる。同様に工業は、中胚葉に由来する筋肉や骨格の機能を充足させるという意味で「中胚葉産業」とよぶのがふさわしい。そして、最後に出現した情報産業の時代は、脳・神経系と感覚諸器官の機能を充足させる時代である。この段階の産業は、外胚葉に由来する器官の機能を充足めざすので「外胚葉産業」だといえる。

このことは人類文明史の大筋をしめすとともに、すこし視点をかえると、戦後日本の世相史にもあてはまる。じっさい戦後の日本人の生活欲求の推移をふりかえってみると、たとえば昭和二〇年代には「腹のたし」になる食物を供給するやけ跡の闇市がにぎわった。しかし昭和三〇年代になると、家事労働を代替する、いわば「筋肉のたし」になるエネルギー変換型の電気掃除機や電気洗濯機といった家電製品への需要がたかまる。それが昭和

四〇年代には、日常生活にたのしきやおもしろさをもたらず、つまりは「脳と心のみ」になる視聴覚情報提供型のカラーテレビやステレオといった家電製品へ、さらに昭和五〇年代から平成にかけては、味覚を充足するグルメ、嗅覚を充足する多様な香り商品や脱臭剤、触覚を充足する冷暖房機器や衣服の風あいなどへ拡大していく。

ただ、こうした議論はA・トフラーが『第三の波 (The Third Wave)』(一九八〇)で論じたところではなかったか。そこでもいさすべきは「情報産業論」の初出が、それより二〇年ちかくもはやい一九六三年のことであったという事実である。「第三の波」はトフラーによってではなく、はるか以前に本書の著者によって「発見」されていたのである。

\*

では、それが発表から三五年余をへた現在も、なぜ「あたらしい」のか。包括的な評価は『梅棹忠夫著作集(第一四巻)』(中央公論社、一九九二)にたいするコメントとして執筆された野村雅一「文明史のラジカルな羅針盤」にくわしい。そこでわたしは、おもに二〇世紀後半の変化が、本書の予言どおりに進行してきた経緯をふりかえてみる。

まず「一九六三年ごろまでの工業は」おまかなあてずっぽうで、画一的な製品を、しかも原料となる物質とエネルギーの直接的消費において、ぞろぞろとつくりだしていたにすぎない。(しかし)自動制御系理論の発展と、エレクトロニクスの発達は、工業的生

産様式それ自体にも、革命的な変革をまきおこし……きめのあらい工業に対する、きめこまかな情報産業的要素(を導入することになる)(五五ページ、カッコ内筆者)

この予言どおり現代日本の工業は、コンピューター制御のロボットの導入で、おおはばに労働力を削減し、不要な原料在庫を極限まできりつめ、しかも消費者の多様な要求にこたえる「多品種少量生産」を実現した。さらにコンビニエンス・ストアが導入したPOS(販売時点情報管理)は、「何が何個、どんな客にうれたか」という情報を商品生産にフィードバックすることで、従来のように「画一的な商品をぞろぞろとつくりだす」段階をじょじょに克服しながら、生活者の要求に根ざした商品生産に手をつけている。

とはいえ近代工業の粗雑さが、完全に克服されたわけではない。そのことは最近、いよいよ深刻になる、地球資源とその環境容量の有限性をめぐる問題にしめされる。その克服は容易ではあるまい。しかし、情報の蓄積と処理の高度化にとまなう科学・技術の発達によって、資源の適正配分や新素材の開発などが前者の問題を、汚染物質の抑制や産業・生活の廃棄物の適正処理など、いわば「文明の静脈」のやくわりをはたすシステムの開発が後者の問題を、それぞれ緩和にみちびく可能性が、すこしは展望できるようになった。本書の予見が、実現の緒につきはじめているといつてよいのではなからうか。

\*

いまひとつ、情報産業は、人間の脳・神経系の機能を代替することによって「プラグマティックな」やくわりをはたすだけではない。著者によると、プラグマティックな意味では無意味な「コンニャク情報」が「感覚器官でうけとめられ、脳内を通過するだけで、感覚器官および脳神経系をおおいに緊張させ活動させる」(二〇五ページ)。適切に編集された言葉やイメージ、色や形、音や映像、味やかおりや肌ざわりは、人間の心身をよろこばせ、たのしませ、めざらしがらせ、おもしろがらせることができるのである。

だからこそ一九九〇年代の、いわゆる「平成不況」下においても、「物質としての商品」の市場が低迷をしいられているのにたいし、「奇怪なる疑似商品」である「感覚情報」を提供するコンサートや演劇、各種イベントやテーマパークなどが、魅力さえあれば、多数の人びとの興味をひくことに成功するのである。アメリカの輸出額にしろる映画の比重が航空機に匹敵する規模をほこっているのも、おなじことを雄弁にものがたっている。

すなわち、人間の脳には「とにかく大量の脳細胞が存在するのである。そして、かれらは活動したがっている。……目的論的な意味があるがなからうが、脳ははたらいてしまう。そのはたらきをささえるものが情報なのである」(二二四ページ)。これまた著者の予見のとおりだというほかない。

\*

ところで、脳・神経系がはたらきはじめると、やがて情報の受容だけでは満足しなくなる。充填された情報が脳・神経系のなかを自由にうごきまわり、あらたに編集されて、こんどはみずから表現したがるようになるからである。そんな転換が日本では、一九七〇年代なかばにおこった。その象徴が、カラオケの発明と普及である。

それは「内気な日本人の国民性」という「神話」をうちくだき、それ以前には「きいてたのしむ」ものであった歌を「うたつたのしむもの」に変化させた。おなじころ誕生したカルチャーセンターも、文芸や絵画、写真や工芸や芸能など、人びとが「情報」に託して「みずからを表現する」ための知識と技術をつたえることで隆盛の途につく。それ以来、自費出版がさかんになり、芸能の世界でもアマチュアからたくさんのプロが誕生した。

このことは世界各地の洞窟にのこる旧石器時代の岩壁画にそくして著者が考察している問題につながる。「それは仲間への伝達かどうかは問題ではない。それはしばしば、自身身の道しるべであり、自分自身の存在証明」(二二六ページ)なのである。ここにきて、やむをえず「はたらいてしまう人間の脳」、すなわち「外胚葉性の諸器官」の機能である「いまのところもっとも不活動的な精神」が、無限の活動にむけてときはなたれる。なぜなら情報には、おびただしい多様性が保証されているからである。

そこでわたしは「五七五」、わずか一七文字で形成される最短の文芸である俳句の多様性のことをおもいだす。かりに日本語の音を一二五種類と想定し、「あああああ……」か

ら「んんんんん……」まで「五七五の音のならば」をすべて、あつさ八〇ミクロンの紙をたばねた文庫本に、一ページあたり一八首ずつ印刷してみる。すると、そのぶあつさは一〇四兆光年、その重量は、文庫本のあつみ一センチメートルあたり一二五グラムとして、六×一〇の二乗トンとみつもられる地球二〇五万個分に相当する。情報の世界は、これだけ多様な可能性を秘めているのである。

ただし、こうしてできる音のならばのほとんどは、まるで無意味である。ならば人の心をうごかす俳句は、どのようにして創出されるのか。まず作者の心身を刺激するなにかの体験、つづいてそれを一七文字に凝縮する創造活動とがもとめられる。はやい話が、

閑<sup>しずか</sup>さや岩にしみ入<sup>いり</sup>蟬<sup>せみ</sup>の声

という俳句は、芭蕉がみちのくの立石寺に足をほこび、そこでの体験を一七文字に凝縮することによってつくりだされた。むろん、こうした体験は未知の書物や芸能とのであいによっても享受できる。しかし、もっとも刺激的な体験が、全身まるごと非日常の世界にあそぶ旅行や観光によってもたらされることは想像にかたくない。だからこそ今日、いよいよ本格化する情報産業社会の到来のかたわらで、日本人だけでなく世界中の人びとが、要は「風光をめぐる」ために国境をこえてまで旅行や観光にでかけるのである。

では、「風光をめぐる」とはなんであろうか。歴史をたずねるとはなんであろうか。これらもけっきょくは、すべて体験情報を享受しているということではないのか」(八四ページ)

そういえば旅行や観光の目的地は、しばしば、ゆたかな自然にめぐまれている。それはまた、つぎのような意味で情報創造の条件ともなる。すなわち、「なんにもない空間がそこにひろがっていて、ただ自然だけがあり、そこにはいけば、静寂が確実に保証されている。そうといった空間が、一種の知的生産基地になるのです」(二五五ページ)

こうしてみると、じつは情報の創造とは、食欲を充足され、生産のための筋肉労働から解放された人間にとっての「あそび」にほかならないことがわかる。そこに、本書の著者が「やや危険思想だ」とかたる、あらゆる存在や行為に、ただ知的なおもしろさだけを追求する純粹な「あそびの精神」がうまれる。ふしぎはない。人類文明史とは、じつはあらゆるいとなみを「あそび」に転換させる努力の過程であったともいえるからである。

じっさい農業がはじまる以前の狩猟採集社会では、獣をかり、海や川にすなったり、野生の木の実や草の根を採集する行為は、生存に不可欠な「仕事」にほかならなかった。ところが農業がはじまると同時に、それが人びとのたのしみに転化する。さらに工業の時代が本格化すると「農業のまねごと」としての園芸が、情報産業の時代には「ミニチュア化された工業」としての手仕事、それぞれあそばれるようになった。そして今日、情報産業

は一方において農業や工業の一層の発展と精緻化をささえると同時に、はやくもコンピュータゲームをはじめ、あたらしい芸術や芸能、学問や技術やデザインなどの創造活動をはじめ、たすけるやくわりをはたしはじめている。

\*

こうしてみると本書の著者こそは、人類文明史における三つの大転換を思想化した三人のひとりだということになる。その三人とは、農業革命後に成立した国家とそこにいきる人間の魂の構造を『国家論』などの著作のなかでとらえなおしたプラトン、産業革命がもたらした工業社会の論理をしゃぶりつくし、それに殉教したカール・マルクス、そして情報産業革命を受肉化<sup>インカネーション</sup>した『情報の文明学』の著者・梅棹忠夫氏である。という意味において、本書こそは人類文明が到達しうる最後の段階の、しかし同時に、その無限の可能性を展望した、比類のない巨大な視野の文明史論にほかなるまい。

そうした時代の人類は、際限のない好奇心を発揮して自然や社会や人間を探索し、そこでえた情報を、静謐にみちたみずからの脳と体内において編集しなおし、あたらしい学術や芸術、芸能や技術やデザインなどの文化に昇華し、表現するあそびに生命のエネルギーを燃焼させることになるであろう。それは、大量の資源消費を前提とする工業社会が提供したゆたかさをこえる人間のいきかたのモデルでもある。それだけではない。相互にこと

なった生活様式と価値観をもつ多様な民族文化は、そのやりとりをとおしてあたらしい文化の創造に積極的なインパクトを提供する。それは、多発する民族紛争の原因ともなる諸民族文化の異質性の、よりこのましい関係のありようを示唆してもいる。

ここにきて議論は、この解説の冒頭の問題意識にもどる。自由な精神だけが実現しうる、あたらしい文化の創造こそが情報産業社会の最大の課題であること、それには発信側と受信側を同一化する「コミュニケーション」ではなく、相互に刺激しあう「やりとり」が大切なこと、コンピュータの発達はそれに役だつ重要な、しかし一要素でしかありえないこと、単一の言語の世界支配はのぞましくないこと、漢字の増大など「むつかしい日本語」では情報産業社会に対応できないこと、などがあきらかになるからである。

このことを本書の著者が、「情報は、送り手受け手のコミュニケーションの問題でなく、系全体のポテンシャルの問題であるらしい」というひとことでもとらえるのを、かつて耳にした記憶がある。多様な文化の共存とやりとり、膨大な情報の蓄積とその処理・伝達の高速度、自由な想像力と誰もが参与できる表現活動、簡潔にして明瞭な言語の創出、そんなことが現実になる時代の経済や政治のメカニズム……『情報の文明学』が展望する知的なあそびの広大な沃野には、あらゆるおもしろさやたのしさ、めずらしさやよろこびにつながる、おびただしい数のステップ・ストーンがちりばめられている。そして本書の著者の言葉をかりれば、未来を予感させる「初期微動」に注意を払いながら、それらのステッ

## 追記

梅棹忠夫氏の「情報」をめぐる論考としては本書のほかに、つぎの著作がある。その壮大な「情報論」の全貌を展望するには、これらの参照がのぞまれる。

梅棹忠夫(著) 『情報論ノート——編集・展示・デザイン……』(中公叢書) 一九八九年三月 中央公論社

梅棹忠夫(著) 『情報の家政学』 一九八九年四月 ドメス出版

なお、本書のほかに、ここにあげた『情報論ノート——編集・展示・デザイン……』と『メディアとしての博物館』(一九八七年二月、平凡社)を収録した、つぎの文献がある。

梅棹忠夫(著) 『情報と文明』 「梅棹忠夫著作集」第一四巻 一九九一年八月 中央公論社



中公文庫

しょうほう ぶんめいがく  
情報の文明学

1999年4月18日 初版発行  
2011年9月30日 8刷発行

著者 梅棹忠夫

発行者 小林敬和

発行所 中央公論新社

〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7  
電話 販売 03-3563-1431 編集 03-3563-3692  
URL <http://www.chuko.co.jp/>

印刷 精興社(本文)  
三晃印刷(カバー)

製本 小泉製本

©1999 Tadao UMESAO  
Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.  
Printed in Japan ISBN4-12-203398-5 C1136

定価はカバーに表示してあります。  
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。  
送料小社負担にてお取り替えいたします。

●本書の無断複製(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。  
また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。